

敷島町文化財調査報告第7集

(山梨県)

# 金の尾遺跡 VI

スポーツクラブ施設建設事業に伴う  
弥生・古墳時代遺跡の発掘調査報告書

1999

敷島町教育委員会

敷島町文化財調査会

# 金の尾遺跡 VI

スポーツクラブ施設建設事業に伴う  
弥生・古墳時代遺跡の発掘調査報告書

1999

敷島町教育委員会  
敷島町文化財調査会

# 本文目次

序文	
はじめに	1
第1章 遺跡をとりまく環境	
1 遺跡の立地と地理的環境	1
2 遺跡周辺の歴史的環境	1
第2章 遺構と遺物	
環濠跡	5
土坑	5
第3章 まとめ	21

# 挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第8図 環濠跡出土遺物(5)	13
第2図 遺構配置図	4	第9図 "	(6) 14
第3図 1号土坑	5	第10図 "	(7) 15
第4図 環濠跡出土遺物(1)	9	第11図 "	(8) 16
第5図 "	(2) 10	第12図 遺物出土位置図(弥生)	17
第6図 "	(3) 11	第13図 "	(古墳) 19
第7図 "	(4) 12	第14図 金の尾遺跡遺構位置図	22

# 表目次

第1表 遺物観察表(土器)	6
第2表 "	(石器) 8

# 図版目次

図版1 金の尾遺跡全景
図版2 環濠跡全景
図版3 出土遺物(土器)
図版4 出土遺物(土器)
図版5 出土遺物(土器)
図版6 出土遺物(石器)、土器出土状況、環濠跡土層断面、発掘参加者



## 序 文

敷島町では町内に残されている遺跡をあらためて見直し、町の遺産として位置付け、その調査、保護を積極的に行っております。

調査いたしました金の尾遺跡は山梨県の弥生時代を代表する遺跡であり、過去の調査によって多くの成果が蓄積されております。今回で6回目の調査となり、遺跡西側の様相が一部解明され、その成果を本書に収めることができました。

遺跡の所在地は、敷島町において現在もっとも開発が進んでいる地域であり、一挙に調査を行うことは困難であります。しかし、たとえ小規模な面積であっても調査を行いそこから得られる情報によって地元地域の歴史環境を復元していくことは行政として重要な責務と考えております。

最後に今回の調査に対しては株式会社ブルーアースの文化財保護行政にたいする深い理解のもとに調査が進められ、また、多くの方々よりご指導、ご協力を賜り記録保存として報告書が刊行できましたことを心から感謝申し上げます。

平成11年(1999)7月

敷島町教育委員会

敷島町文化財調査会

## 例 言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町大下条に所在する金の尾遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、株式会社ブルーアースによるスポーツクラブ施設建設に伴う発掘調査である。発掘調査から報告書刊行までの経費は株式会社ブルーアースが負担した。
3. 本調査は、敷島町教育委員会の指導のもと、敷島町文化財調査会と株式会社ブルーアースとで取り交わした協議書に基づき同町教育委員会と同町文化財調査会が行った。
4. 調査組織 調査主体者 敷島町教育委員会生涯教育課・敷島町文化財調査会  
調査担当者 大嵐正之(敷島町教育委員会生涯教育課主任)  
調査事務局 敷島町文化財調査会
5. 発掘調査は平成8年11月12日から11月29日まで行われた。整理作業及び報告書作成は敷島町教育委員会文化財整理室で行った。
6. 本書の執筆、編集及び遺物、遺構の写真撮影は大嵐正之が行った。遺構の空中撮影は株式会社フジテクノが行った。
7. 発掘調査ならびに報告書作成にあたり、次の方々、機関よりご指導、ご協力を戴いた。ここにご芳名を記して厚く感謝申し上げます。  
田代 孝、末木 健、坂本美夫、出月洋文、小林健二(山梨県埋蔵文化財センター)  
中山誠二、森原明廣(山梨県教育委員会)、羽中田壮雄(敷島町文化財審議会)  
皆川 洋(竜王町教育委員会)、山梨県埋蔵文化財センター、池谷建材店(順不同、敬称略)
8. 発掘調査、整理作業参加者  
浅川松子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、尾澤玉枝、小林明美、三枝延子、末松福江  
関本芳子、高添美智子、近浦正治、保坂広昭、保延 勇(敬称略)
9. 本調査で得られたすべての遺物、記録は一括して敷島町教育委員会に保管してある。

## 凡 例

1. 出土遺物一覧表中、実測図中および写真図版中の遺物番号は統一したものである。したがって写真図版を掲載していないものもあるため同図版は必ずしも連続番号とはならない。



# はじめに

JR中央本線竜王駅の北側に広がる金の尾遺跡は、南北約400m、東西約300mの広範囲にわたる遺跡である。昭和52年の発見以来今回も含めて6回におよぶ調査が行われている。この結果縄文時代前期から平安時代中期までの遺構、遺物が発見をされ金の尾遺跡の歴史的環境の復元も僅かではあるが可能となり、遺跡全体の重要性がますます高くなってきている。

今回の6次調査では民間企業の開発によるもので、面積は300㎡と僅かであったがこれまで調査が行われず空白地帯であった遺跡西側の様相の一部を解明することができた。

なお、便宜上第1回目の調査を1次調査とし、調査順に数字を付すこととする。

6次調査の標高は285mを測る。

## 第1章 遺跡をとりまく環境

### 1. 遺跡の立地と地理的環境

遺跡の所在する敷島町は、甲府盆地の北西端部に位置し、県都甲府市の西方に隣接する。町域は南北約1.5km、東西約4kmで、南北に細長い帯状を呈している。町の北部は太刀岡山など茅ヶ岳・黒富士火山によって形成された千m級の山々が点在する山岳地帯である。また、町の南部は奥秩父山系の金峰山に源を持つ荒川によって形成された扇状地帯となっている。町域の北部約8割が山間地帯、南部の約2割が扇状地（一部丘陵地）である。この扇状地上に市街地が広がり、また、多くの遺跡も分布している。

金の尾遺跡は、敷島町東部を南流する荒川によって形成された扇状地の扇央部分に位置し、荒川右岸、貢川左岸の自然堤防上に営まれた遺跡である。遺跡西方には敷島、双葉両町にまたがる道尾山に源をもつ小河川の貢川が南流し、遺跡南端において東に流れの向きを変える。また、遺跡の東側には南北に河川の痕跡が認められる。これは過去において数度となく水害を齎らした荒川の跡と考えられる。このことから、過去においては、丁度北方を除いた三方を河川に囲まれた状態で遺跡が存在していた時期もあったことになり、地形的に微高地上に形成されていたことがうかがえる。

### 2. 遺跡周辺の歴史的環境

6次調査地点から南東へ約300mに位置する1、4次調査地では縄文時代前期末の十三菩提式期や中期の勝坂期式、藤内式期、後期の曾利式期の遺物や住居跡が調査されている。また、弥生時代後期に営まれた住居跡3軒、これら住居に伴うものと考えられる周溝墓跡も26基を数え弥生時代後期における生活域と墓域が明瞭になった好例であり、山梨県における弥生時代研究の重要な位置をしめる遺跡となっている。また、4次調査地点の隣接地で行われた5次調査では、弥生時代末と考えられる壺棺が土壇墓より埋葬時のままの姿で出土している。これらは弥生時代から古墳時代にかけての埋葬方法を探る上で大変重要な資料となろう。金の尾遺跡周辺の古墳時代遺跡をみると、前期では遺跡北方約400mに所在する御岳田遺跡、北東約800mに位置する松ノ尾遺跡があげられよう。両遺跡とも集落遺跡であるが遺跡の全容はまだ明らかにはなっていない。なお、御岳田遺跡の調査において水晶製の丸玉未完成品1点が原石と共に出土しているが、加工施設などは発見されていない。また、金の尾遺跡では2次調査において前期住居跡1軒、後期住居跡1軒、4次調査において前期住居跡1軒が調査さ

れている。更に今回の6次調査において環濠遺構中から多量の前期に位置付けられる土器類が出土している。

遺跡の位置する甲府盆地北西部周辺における古墳の出現は6世紀に入ってからである。遺跡の北東、荒川対岸の甲府市千塚の千塚古墳群や同市湯村の万寿森古墳、更には遺跡西方に所在する双葉町双葉1号墳、往生塚古墳、竜王町中秣塚古墳（赤坂台古墳群）などがあげられる。金の尾遺跡のある敷島町は東方に千塚古墳群、西方に赤坂台古墳群が位置し、後期群集墳に囲まれた地域といえよう。本来敷島町にも両古墳群に属す古墳が多く存在したが田畑の開墾整備などによって消滅し、現在では遺跡北方1.6kmに所在する大庭古墳（円墳、未調査）と北方約2.6kmの大塚古墳（円墳）が残るのみである。

遺跡の北西約2.2kmには県内最古の窯跡として知られる天狗沢瓦窯跡が存在する。7世紀後半に位置付けられる3基の登り窯を持ち、県内初見の意匠である中房蓮子1+6の素縁、有段縁2種類の素弁八葉蓮華文鏡瓦や男、女瓦などが出土しており、本県古代史上重要な遺跡である。現在までのところ需要先である遺跡は発見されていないが、平成9年に行った松ノ尾遺跡2次調査において遺物包含層中より3点の布目瓦片が出土している。この瓦が天狗沢のものであるか否かは現在調査中でありその結果を待ちたい。

平安時代遺跡では前述の御岳田遺跡、松ノ尾遺跡で平安中期から後期にかけての集落が発見されている。特に松ノ尾遺跡からは3次に渡る調査の結果、中～後期住居跡26軒、掘立柱建物跡（総柱）1棟の他、遺物として銅造阿弥陀如来坐像2軀（1軀は鍍金を施す）、緑釉耳皿、銅製金具、多量の墨書土器などが出土しており一般集落とは異なる特別な性格をもった遺跡と考えられる。

金の尾遺跡では2次調査で1軒、5次調査で3軒の住居跡が調査されている。いずれも前期末から中期にかけてのものである。

鎌倉時代以降においては、敷島町は志麻庄に属し京都松尾大社、五撰家の一つ九条家などの荘園地であったと考えられている。

金の尾遺跡周辺は以上のように山梨県史における各時代の重要な遺跡が点在する地域となっている。

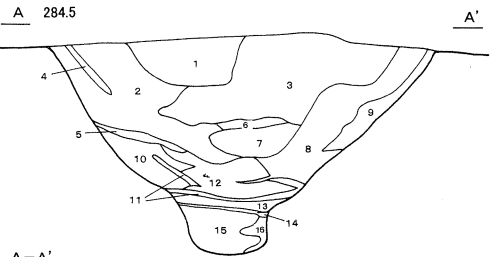
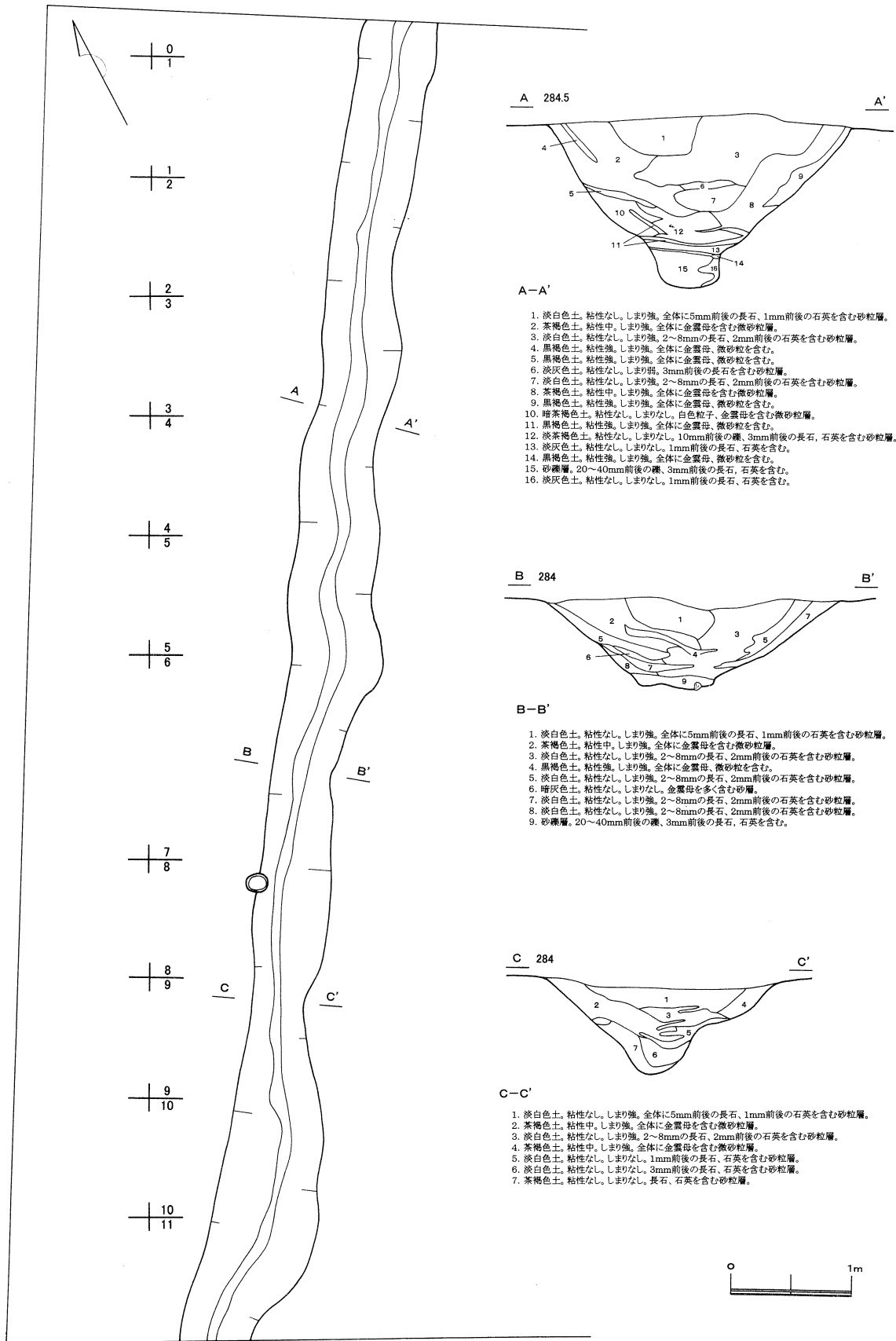


■ 金の尾遺跡推定範囲

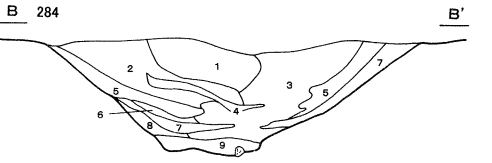
- |                |               |
|----------------|---------------|
| A 金の尾遺跡第6次調査地点 | E 大庭古墳        |
| B 御岳田遺跡        | F 八幡遺跡 (竜王町)  |
| C 松ノ尾遺跡        | G 元免許遺跡 (竜王町) |
| D 天狗沢瓦窯跡       | H 往生塚古墳 (双葉町) |

第1図 遺跡位置図

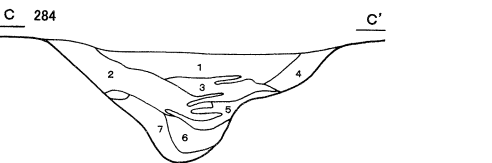




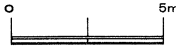
- A-A'
1. 淡白色土。粘性なし。しまり強。全体に5mm前後の長石、1mm前後の石英を含む砂粒層。
  2. 茶褐色土。粘性中。しまり強。全体に金雲母を含む微砂粒層。
  3. 淡白色土。粘性なし。しまり強。2~8mmの長石、2mm前後の石英を含む砂粒層。
  4. 黒褐色土。粘性強。しまり強。全体に金雲母、微砂粒を含む。
  5. 黒褐色土。粘性強。しまり強。全体に金雲母、微砂粒を含む。
  6. 淡灰色土。粘性なし。しまり強。3mm前後の長石を含む砂粒層。
  7. 淡白色土。粘性なし。しまり強。2~8mmの長石、2mm前後の石英を含む砂粒層。
  8. 茶褐色土。粘性中。しまり強。全体に金雲母を含む微砂粒層。
  9. 黒褐色土。粘性強。しまり強。全体に金雲母、微砂粒を含む。
  10. 暗茶褐色土。粘性なし。しまりなし。白色粒子、金雲母を含む微砂粒層。
  11. 黒褐色土。粘性強。しまり強。全体に金雲母、微砂粒を含む。
  12. 淡茶褐色土。粘性なし。しまりなし。10mm前後の礫、3mm前後の長石、石英を含む砂粒層。
  13. 淡灰色土。粘性なし。しまりなし。1mm前後の長石、石英を含む。
  14. 黒褐色土。粘性強。しまり強。全体に金雲母、微砂粒を含む。
  15. 砂礫層。20~40mm前後の礫、3mm前後の長石、石英を含む。
  16. 淡灰色土。粘性なし。しまりなし。1mm前後の長石、石英を含む。



- B-B'
1. 淡白色土。粘性なし。しまり強。全体に5mm前後の長石、1mm前後の石英を含む砂粒層。
  2. 茶褐色土。粘性中。しまり強。全体に金雲母を含む微砂粒層。
  3. 淡白色土。粘性なし。しまり強。2~8mmの長石、2mm前後の石英を含む砂粒層。
  4. 黒褐色土。粘性強。しまり強。全体に金雲母、微砂粒を含む。
  5. 淡白色土。粘性なし。しまり強。2~8mmの長石、2mm前後の石英を含む砂粒層。
  6. 暗茶褐色土。粘性なし。しまりなし。金雲母を多く含む砂層。
  7. 淡白色土。粘性なし。しまり強。2~8mmの長石、2mm前後の石英を含む砂粒層。
  8. 淡白色土。粘性なし。しまり強。2~8mmの長石、2mm前後の石英を含む砂粒層。
  9. 砂礫層。20~40mm前後の礫、3mm前後の長石、石英を含む。



- C-C'
1. 淡白色土。粘性なし。しまり強。全体に5mm前後の長石、1mm前後の石英を含む砂粒層。
  2. 茶褐色土。粘性中。しまり強。全体に金雲母を含む微砂粒層。
  3. 淡白色土。粘性なし。しまり強。2~8mmの長石、2mm前後の石英を含む砂粒層。
  4. 茶褐色土。粘性中。しまり強。全体に金雲母を含む微砂粒層。
  5. 淡白色土。粘性なし。しまりなし。1mm前後の長石、石英を含む砂粒層。
  6. 淡白色土。粘性なし。しまりなし。3mm前後の長石、石英を含む砂粒層。
  7. 茶褐色土。粘性なし。しまりなし。長石、石英を含む砂粒層。



第2図 遺構配置図

## 第2章 遺構と遺物

### 環濠跡(第2図、図版2)

**概要** 建物建設予定地にほぼ沿って北北東から南南西にかけて確認された。

**形状・規模** 調査区内では長さ55.7mを測る。遺構は更に区域外の南北に及んでいるため全長を把握するには至っていない。

幅はA, A'間が最も深く1.45m、B, B'、C, C'間は共に0.7mを測った。

壁は北側部分において40°とやや角度を持って立ち上がりV字型を呈す。中間においてその角度は30°前後と緩やかな傾斜となりU字型へ変化する。南側部分において再び角度を持ち、V字型を呈すが深さが浅いためそれほど急には感じられない。

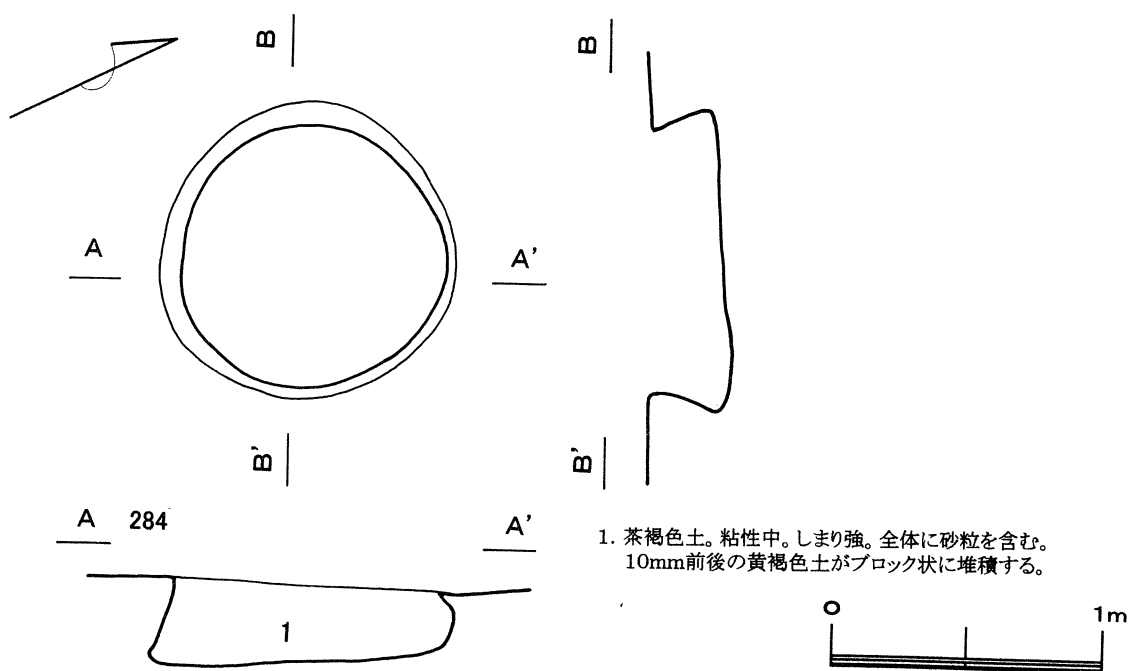
**遺物** 遺構底部より弥生土器が4点、磨製石鏃1点、打製石斧5点が出土している。また、1mほど堆積した第3層砂粒層中より古墳時代前期土師器が全面から出土している。

### 土坑(第3図)

#### 1号土坑

**概要** グリット8に位置する。環濠の西側上場部分にあり長、短軸とも1m、深さ25cmを測る。壁は下場がやや内側に入るフラスコ状を呈す。

平面形は円形で土坑と環濠の土層関係から環濠が堆積した後に造られていると考えられる。遺物は出土しなかった。



第3図 1号土坑

【第1表】 遺物観察表（土器）

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴	グリット
1	弥生土器	浅鉢	器高 6.55cm 口径 12.9 cm 底径 5.2 cm	金雲母、 小礫を含む	暗茶褐色	良	内面口辺部横方向のハケ目。 外面体部へラ磨き。 体部下半ハケ目後、磨き。	G-2
2	弥生土器	浅鉢	器高 7.1 cm 口径 14.3 cm 底径 6.0 cm	小礫、砂粒 を多く含む キメ粗い	淡茶色	良	内面底部から体部にかけてへラ整形。	G-4
3	弥生土器	甌	器高 7.5 cm 口径 14.2 cm 底径 3.7 cm	砂粒を多く 含むキメ粗い	淡茶色 (一部黒色)	良	内面体部横方向のハケ目。内面下半ハケ目後、 磨き。外面体部斜め方向のハケ目。外面下半 ハケ目後、磨き。底部に直径1cmの円孔を有す。	G-5
4	弥生土器	壺	器高 18.1 cm 口径 10.5 cm 底径 3.8 cm	金雲母、長石、 石英を多く含む	淡茶色 (一部黒色)	良	外面口辺部から体部に縦方向のハケ目。 体部から底部に斜め方向のハケ目。 内面口辺部横方向のハケ目。	G-7
5	土師器	高坏	器高 9.1 cm 推定口径 13.0 cm 底径 8.7 cm	小礫、長石、 石英を含む	明茶褐色	不良	坏部内面口辺部斜め方向の磨き。 坏部外面縦方向の磨き。	G-2
6	土師器	高坏	口径 13.7 cm	キメ粗い	明茶色	良	坏部内面に磨き。	G-6
7	土師器	高坏	推定口径 13.8 cm	小礫を含む	茶褐色	良		G-2
8	土師器	器台	器高 9.4 cm 推定口径 8.7 cm 推定底径 11.3 cm	砂粒を含むが キメ細かい	明茶色	良	脚部に直径1.4cmの円孔が3ヶ所穿た れている。器受部中央に直径1.05cm の円孔を持つ。	G-5
9	土師器	器台	底径 10.5 cm	砂粒を多く含む キメ粗い	茶褐色	良	脚部に直径0.8cmの円孔が3ヶ所穿たれて いる。外面脚部へラ磨き。一部朱付着。 器受部中央に直径0.9cmの円孔を持つ。	G-8
10	土師器	器台	口径 9.4 cm	砂粒、小礫を含む	茶褐色	良	器受部中央に直径1.3cmの円孔を持つ。	G-4
11	土師器	器台	推定口径 10.7 cm	砂粒を多く含む キメ粗い	淡茶色	良	器受部中央に直径0.9cmの円孔を持つ。	G-4
12	土師器	器台	口径 9.8 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。器受部内面へラ 磨き。脚部外面へラ削りによる整形。 器受部中央に直径1cmの円孔を持つ。	G-6
13	土師器	器台	口径 8.8 cm	1mm前後の 小礫を含み緻密	内面 褐色 外面 茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。器受部内面へラ 磨き。円孔周辺にクレーター状の剥離痕。 器受部中央に直径1cmの円孔を持つ。	G-6
14	土師器	器台	口径 9.6 cm	金雲母、長石、 石英を含む	黒茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。器受部内面へラ 磨き。器受部中央に直径1.2cmの円孔を持つ。 器受部内面へラ磨き。	G-3
15	土師器	器台	推定口径 11.4 cm	キメ細かく緻密	明茶褐色	良	器受部中央に直径0.9cmの円孔を持つ。	G-3
16	土師器	器台	口径 9.8 cm	微砂粒を多く含む	黄茶色	不良	器受部中央に直径1.6cmの円孔を持つ。	G-9
17	土師器	器台	口径 9.1 cm	砂粒を含む	淡茶色	良	器受部は水平で、上面はクレーター状に 凹凸を呈す。 中央に直径0.4cmの円形窪みを有す。	G-2
18	土師器	坏	器高 4.1 cm 口径 9.2 cm 底径 3.8 cm	砂粒を多く含む キメ粗い	赤褐色	良		G-2
19	土師器	小型丸底鉢	推定器高 9.4 cm 口径 5.6 cm 底径 1.5 cm	キメやや粗い	茶褐色	良	内面底部にハケ目。	G-2
20	土師器	埴	器高 8.7 cm 推定口径 12.5 cm 底径 3.8 cm	キメ細かい	黒色 (口縁一部灰茶色)	良	内・外面口辺部横ナデ仕上げ。外面体部 斜め方向のハケ目後、へラ磨き。 底部に2.5cmの窪みを有す。	G-6
21	土師器	小型壺	推定口径 9.4 cm 底径 3.6 cm	小礫を含む	茶褐色	良	内面胴部横方向のハケ目。 外面胴部縦方向のへラ磨き。	G-7
22	土師器	埴	器高 5.8 cm 口径 11.6 cm 底径 4.2 cm	砂粒を多く含む	茶褐色	良	内面口辺部から体部にかけてハケ目。 外面口辺部から体部にかけて縦方向のハ ケ目後、磨き。	G-6
23	土師器	小型埴	器高 6.3 cm 口径 9.2 cm 底径 1.9 cm	砂粒を含む	茶褐色	良	内面口辺部横方向のハケ目。 内面胴部から底部へラ調整。 外面胴部ハケ目後、磨き。	G-6
24	土師器	埴	器高 7.25cm 口径 11.7 cm 底径 3.7 cm	砂粒を含む	明茶褐色	良	内面口辺部横方向のハケ目後、磨き。	G-4
25	土師器	埴	器高 17.2 cm 口径 12.9 cm 底径 5.4 cm	長石を含む 金雲母、石英 を少量含む	茶褐色	良	内面口辺部縦方向のへラ磨き。外面口辺 部から胴部にかけて縦方向のへラ磨き。 胴部下半横方向のへラ磨き。	G-3
26	土師器	広口口縁 小型壺	底径 3.0 cm	砂粒、小礫 を多く含む キメ細かい	茶褐色	良	内・外面横方向のハケ目後、ナデ。	G-2

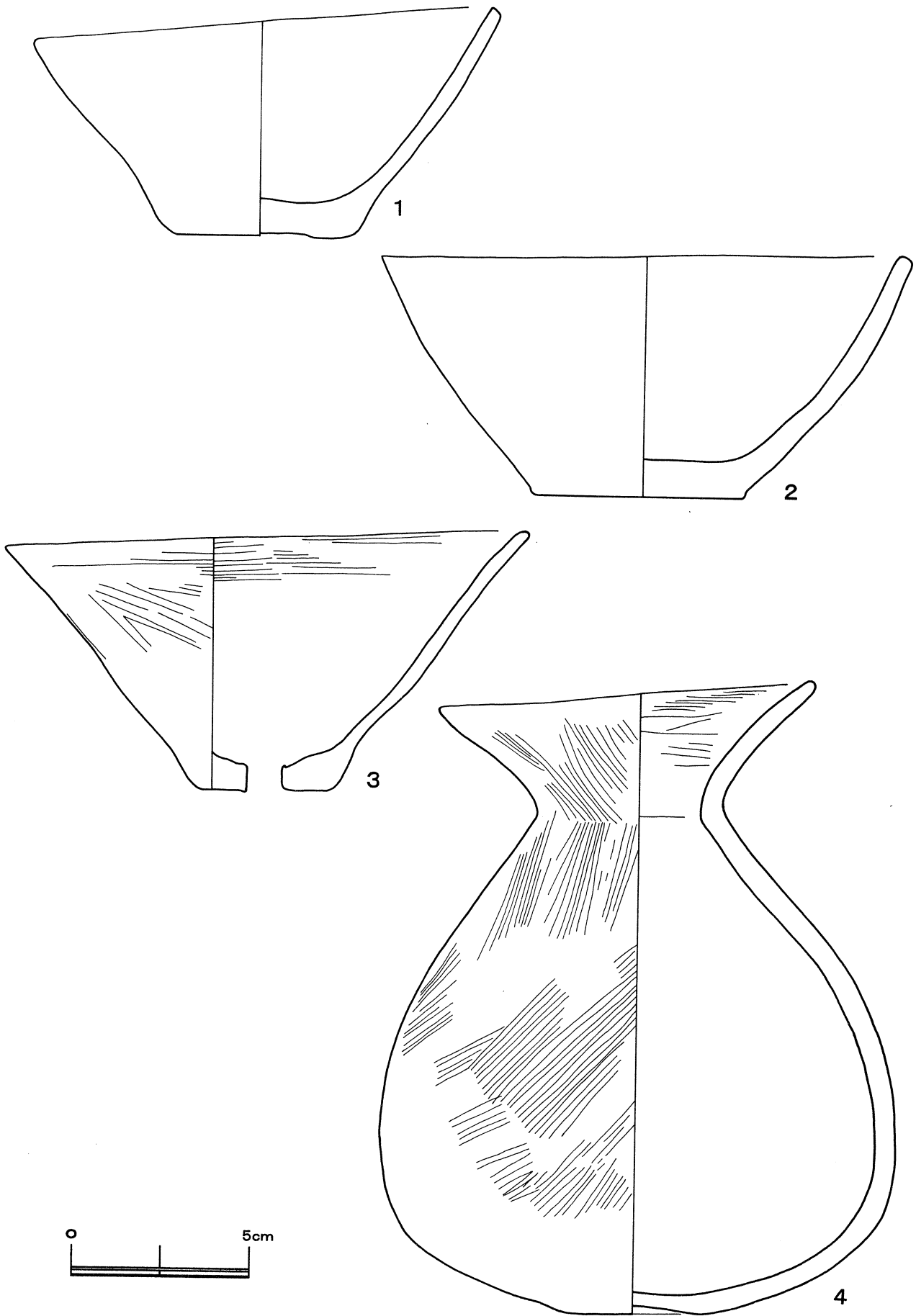


No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴	グリット
27	土師器	小型壺	器高 7.2 cm 口径 8.6 cm 底径 1.4 cm	砂粒、小礫 を多く含む キメ細かい	茶褐色	良	内面胴部上半横方向のハケ目。	G-4
28	土師器	小型短頸壺	器高 6.7 cm 口径 5.6 cm 底径 5.2 cm	3mm前後の 小礫を含む キメ細かい	褐色	良	内面口辺部横方向のハケ目。 外面口辺部及び胴部下半縦方 向のハケ目。	G-10
29	土師器	小型鉢	器高 7.8 cm 推定口径 8.9 cm 底径 5.7 cm	キメ細かく緻密	淡茶色	良	内面全体及び外面上半横方向 の磨き。	G-3
30	土師器	小型壺	推定器高 14.5 cm 口径 7.7 cm	キメ細かく緻密	茶褐色	良	外面口辺部横方向のヘラ磨き。 胴部縦方向のヘラ磨き。	G-2
31	土師器	短頸壺	器高 11.7 cm 推定口径 6.0 cm 底径 3.6 cm	長石、石英 を含む キメ粗い	明茶褐色	良	内面底部ハケ目。 外面胴部横ナデ。 一部横方向のヘラ磨き。	G-5
32	土師器	小型壺		キメ細かく緻密	明茶褐色	良	外面胴部縦方向のヘラ磨き。	G-2
33	土師器	小型壺	推定器高 12.5 cm 推定口径 10.4 cm	2mm前後の 小礫を含む	暗茶色	良	外面頸部ハケ目後、磨きが施 される。	G-4
34	土師器	壺	器高 15.2 cm 口径 10.3 cm 底径 6.1 cm	全体に小礫 を多く含む キメ粗い	淡茶色	やや良	内面口辺部から胴部上半横方向のハケ 目。下半斜め方向のハケ目。外面口辺部 縦方向のハケ目。外面胴部クレーター状。	G-4
35	土師器	壺	器高 14.6 cm 推定口径 11.0 cm 底径 5.7 cm	キメ細かく緻密	白茶色	良	内面全体に櫛描きが施される。 外面胴部ハケ目後、縦方向の ヘラ磨き。	G-7
36	土師器	壺	器高 16.7 cm 口径 8.1 cm 底径 8.2 cm	砂粒を含む キメ粗い	淡茶褐色	良	外面胴部全体にハケ目。	G-0 G-4
37	土師器	短頸壺	推定器高 14.8 cm 推定口径 6.3 cm 推定底径 5.2 cm	砂粒、小礫 を多く含む キメ粗い	明茶色	良	内・外面胴部上半横方向のハケ 目後、横ナデ。外面胴部縦方向 の磨き。	G-4
38	土師器	壺	器高 17.0 cm 底径 7.8 cm	小礫、石英 を含む	茶褐色 (外面一部黒色)	良	内面全体横方向のハケ目後、 磨き。外面全体斜め方向のヘラ 磨き。	G-5
39	土師器	短頸壺	推定器高 16.5 cm 推定口径 7.0 cm 底径 4.8 cm	キメやや粗い	明褐色	良	内面底部ハケ目。 外面胴部に一部磨き。	G-3
40	土師器	壺	推定口径 15.9 cm	砂粒を多く含む	淡茶色	良	内・外面口辺部横ナデ仕上げ。 胴部から底部欠損。	G-11
41	土師器	壺	推定口径 15.0 cm	2mm前後の 小礫を含む	内面 淡褐色 外面 明褐色	良	内面口辺部横方向のハケ目後、 ナデ。外面口辺部縦方向のハケ 目後、ナデ。胴部から底部欠損。	G-4
42	土師器	壺 or 甕	推定口径 18.2 cm	砂粒を多く含む キメ粗い	茶褐色	やや良	内面口辺部から頸部にかけて横方向のハケ 目後、口辺部のみナデ整形。外面頸部から 胴部斜め方向のハケ目。胴部から底部欠損。	G-3
43	土師器	壺	口径 25.5 cm	小礫を多く含む キメ粗い	淡茶色	やや良	口辺上部に有段。 外面頸部縦方向のヘラ磨き。	G-4
44	土師器	壺	推定口径 16.6 cm	砂粒を多く含む	明茶色	良	内面口縁部から胴部中央横方向のハケ 目。胴部下半斜め方向のハケ目。外面頸 部から胴部下半縦方向のハケ目。	G-5
45	土師器	壺	口径 13.6 cm	砂粒を多く含む キメ粗い	明茶色	良	内面口辺部横ナデ仕上げ。 外面頸部縦方向のクシ目後、ナデ。 胴部から底部欠損。	G-0
46	土師器	壺	器高 26.0 cm 口径 13.5 cm 底径 7.8 cm	砂粒を多く含む キメ粗い	淡茶色	良	有段口縁。内面口縁から口辺部ヘラ磨き。頸 部から底部横方向のハケ目。外面頸部縦方 向の櫛目。頸部から底部縦方向のヘラ磨き。	G-10
47	土師器	壺	器高 27.6 cm 口径 11.6 cm 底径 7.8 cm	小礫を多く含む キメ粗い	明茶色	良	内面頸部から底部にかけてハケ目 後、ナデ。外面口辺部縦方向のハ ケ目後、ナデ。胴部所々に磨き。	G-4
48	土師器	壺	器高 26.5 cm 推定口径 13.6 cm 底径 9.1 cm	小礫を含む キメ細かく緻密	茶褐色	良好	内面口辺部横方向のハケ目後、ナデ整 形。外面口辺部から頸部縦方向のハケ目 後、ナデ整形。胴部から底部ヘラ磨き。	G-0
49	土師器	壺	底径 10.5 cm	3mm前後の 小礫を含む	外面底部黒褐色 内面 明茶色 外面 茶褐色	良	内面全体にハケ目。外面胴部下半 斜め方向のヘラ磨き。胴部から底部 縦方向のハケ目。胴部上半を欠損。	G-5
50	土師器	S字状口縁 台付甕	推定口径 17.5 cm	小礫、長石、 金雲母を含む	明茶褐色	良	外面胴部斜め方向のハケ目。 胴部から台部にかけて欠損。	G-2
51	土師器	S字状口縁 台付甕	推定口径 14.2 cm	小礫、長石、 金雲母を含む	淡茶色	良	内面頸部横方向のハケ目。口辺部横ナデ。 外面頸部から胴部縦方向のハケ目。胴部下 半から胴部横方向の櫛目。胴部下半を欠損。	G-2
52	土師器	S字状口縁 台付甕	口径 7.8 cm	小礫を少量含む	淡茶色	良	外面口辺部横ナデ仕上げ。 外面胴部上半縦方向のハケ目。 胴部から台部にかけて欠損。	G-1

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴	グリット
53	土師器	S字状口縁 台付甕	推定口径 16.9 cm	1mm前後の 小礫を含む	明茶褐色	良	外面口辺部横ナデ仕上げ。 外面胴部上半縦方向のハケ目後、一部 にナデを施す。胴部から台部欠損。	G-4
54	土師器	小型S字状 口縁台付甕	口径 7.6 cm 底径 4.0 cm	石英、長石 を多く含む キメ粗い	明褐色	良	外面口辺部横ナデ仕上げ。 外面胴部に斜め方向のハケ目後、ナデ 整形。台部欠損。	G-0
55	土師器	S字状口縁 台付甕	口径 10.3 cm	砂粒を多く含む	暗茶色	良	外面口辺部横ナデ仕上げ。 外面胴部上半斜め方向のハケ目。 肩部横方向のハケ目。胴部以下欠損。	G-7
56	土師器	S字状口縁 台付甕	口径 11.15cm	金雲母、長石 を多く含む	内面 茶褐色 外面 黒茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。 外面胴部上半斜め方向のハケ目。 胴部以下欠損。	G-2
57	土師器	S字状口縁 台付甕	器高 32.4 cm 口径 16.1 cm 底径 10.0 cm	金雲母を多く含む	黒茶色 台面 茶褐色 外面口辺部 淡茶色	良	外面胴部から台部にかけて斜め方向の ハケ目後、ナデ整形。	G-3
58	土師器	台付甕	底径 10.5 cm	砂粒を含む 金雲母を少量含む	明茶褐色	良	外面胴部から台部にかけて縦方向の ハケ目。台部の一部ナデ整形。 口縁部から胴部中央までを欠損。	G-2

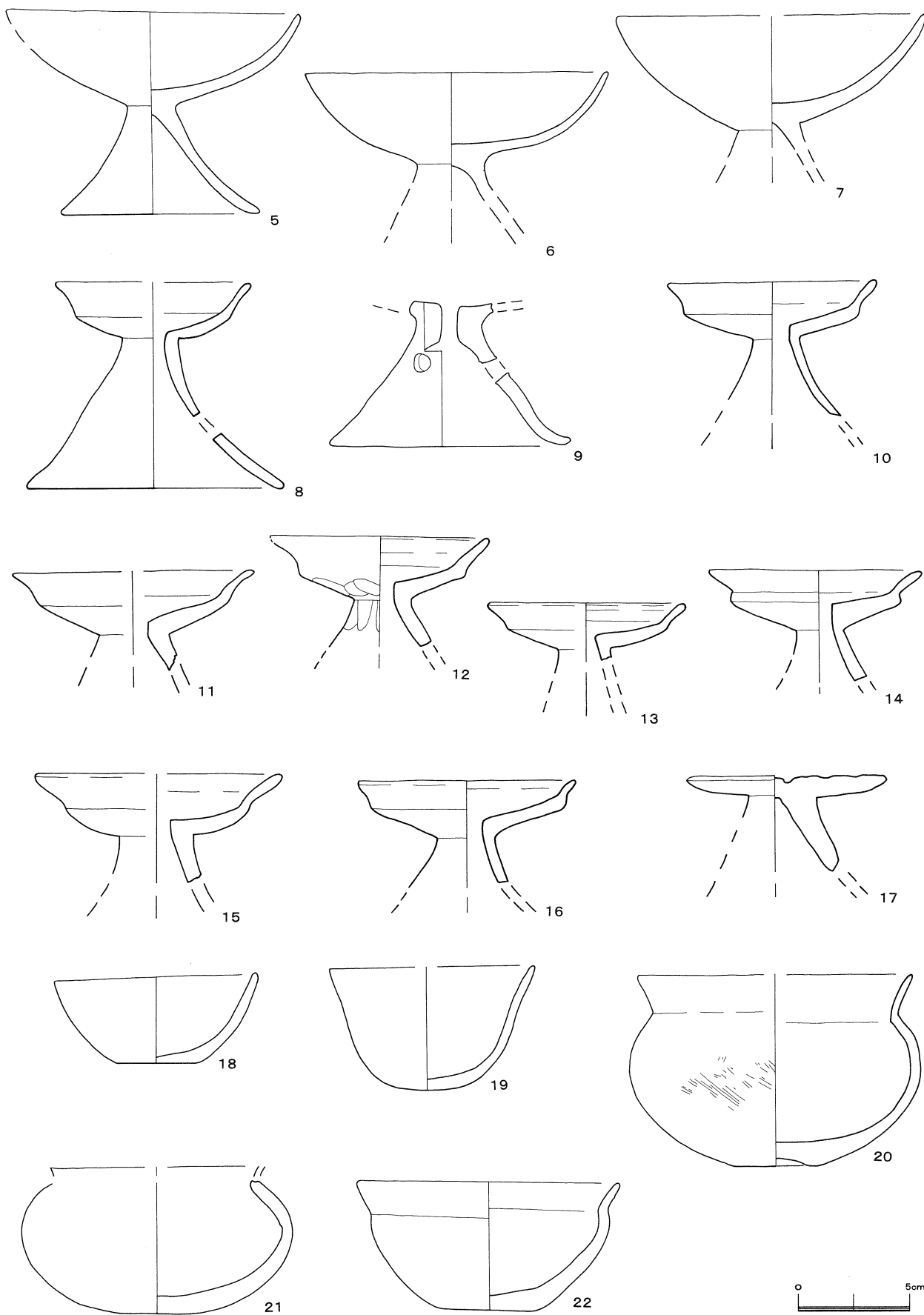
[第2表] 遺物観察表 (石器)

No	器種	器形	計測値	グリット	備考
S-1	石器	打製石斧	長軸 13.1 cm 短軸 5.7 cm 厚さ 1.9 cm	G-5	
S-2	石器	打製石斧	長軸 6.3 cm 短軸 5.2 cm 厚さ 1.4 cm	G-5	
S-3	石器	打製石斧	長軸 9.7 cm 短軸 9.7 cm 厚さ 2.0 cm	G-7	
S-4	石器	打製石斧	長軸 9.9 cm 短軸 5.9 cm 厚さ 2.4 cm	G-3	
S-5	石器	打製石斧	長軸 9.95 cm 短軸 4.75 cm 厚さ 1.2 cm	一括	
S-6	石製品		長軸 6.8 cm 短軸 5.4 cm 厚さ 0.9 cm	G-3	
S-7	石器	磨製石鏃	長軸 2.8 cm 短軸 1.8 cm 厚さ 0.2 cm	重量 1.78 g G-4	
S-8	石器	石鏃	長軸 1.6 cm 短軸 1.5 cm 厚さ 0.3 cm	重量 0.48 g G-5	水晶製 不明

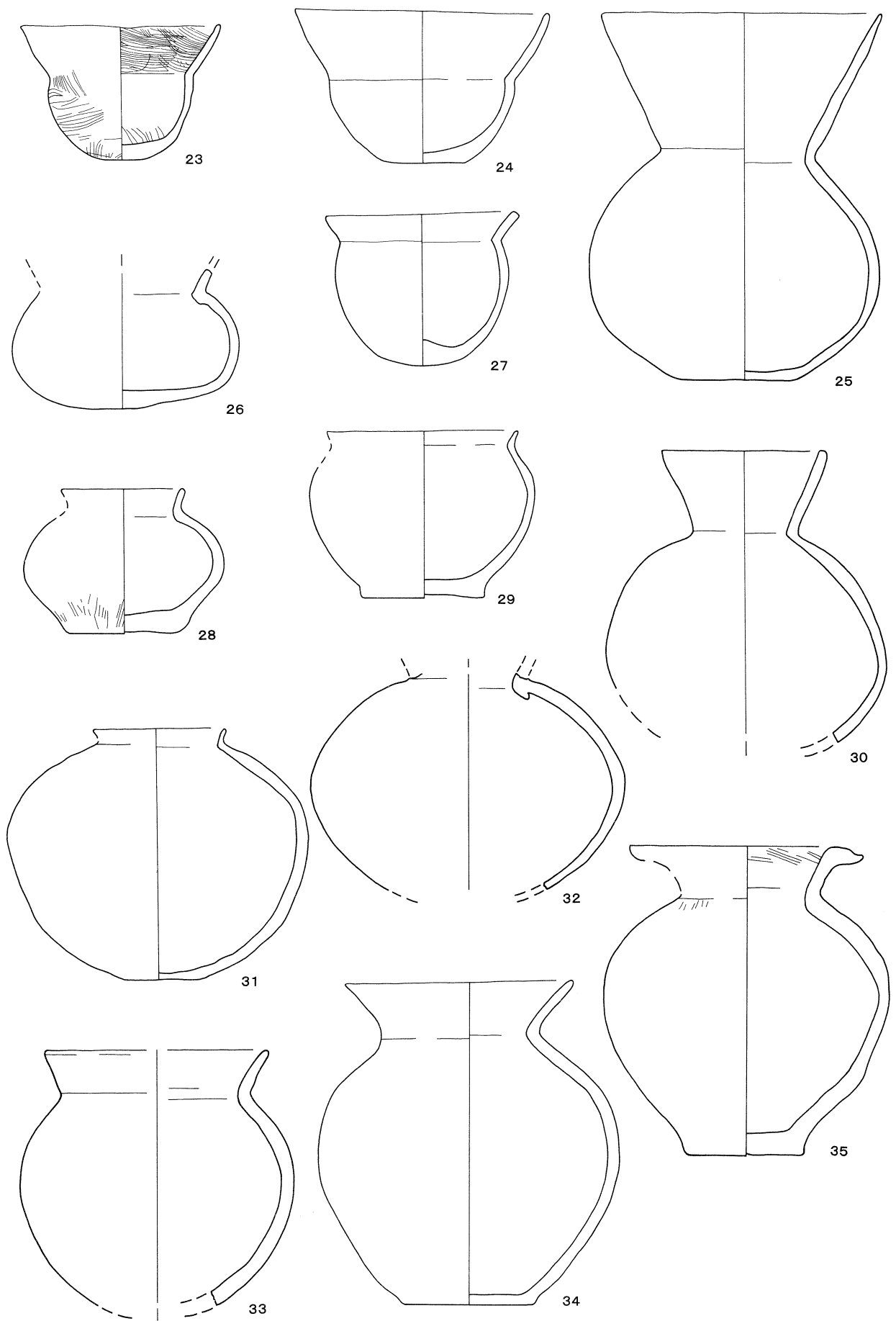


第4図 環濠跡出土遺物(1)

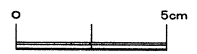


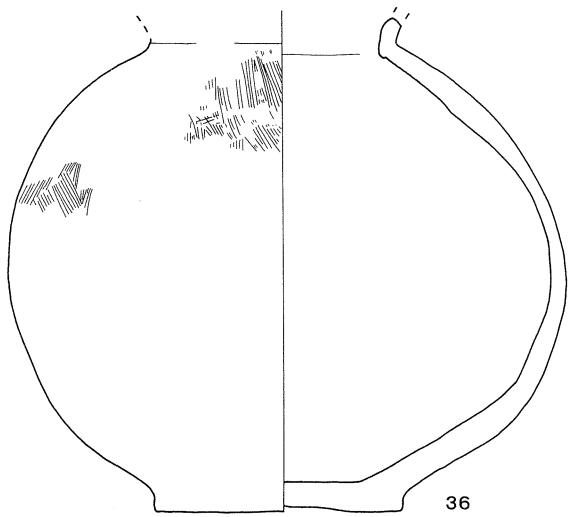


第5圖 環濠跡出土遺物(2)

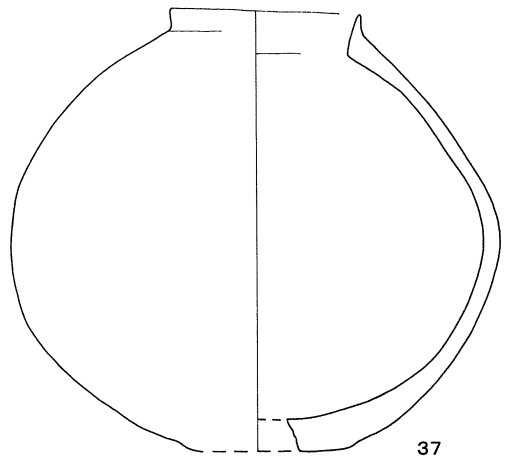


第6図 環濠跡出土遺物(3)

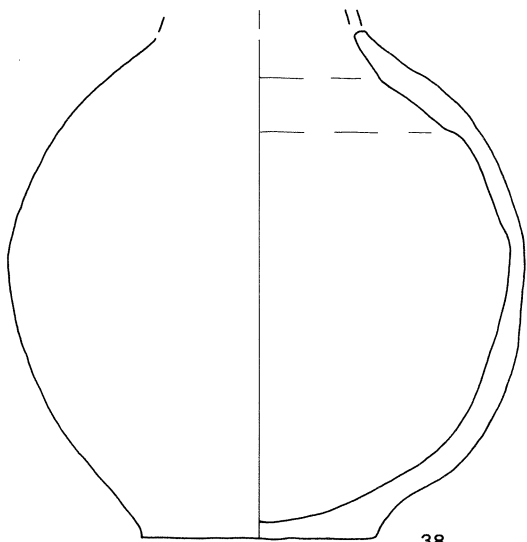




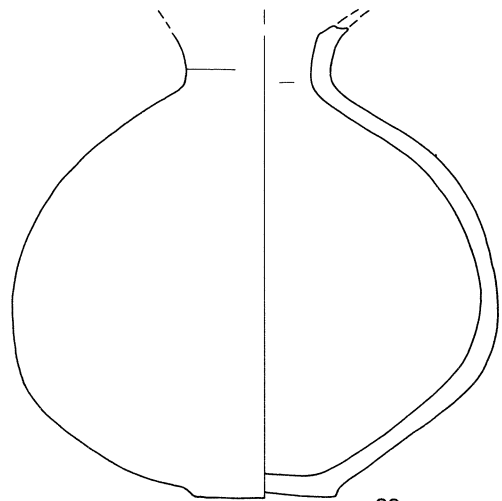
36



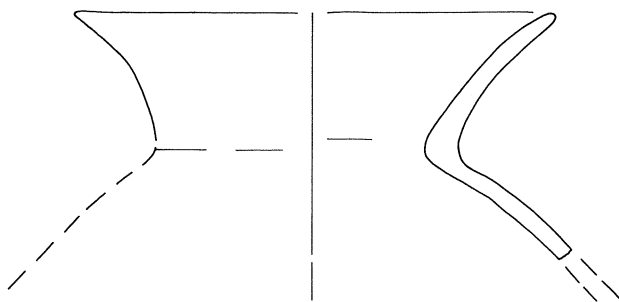
37



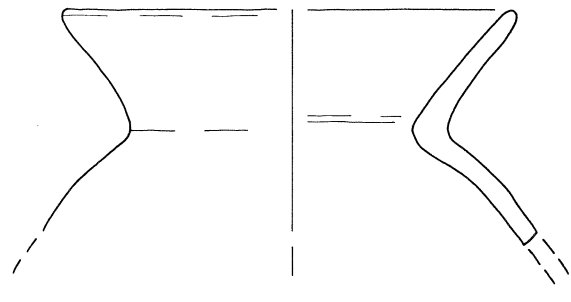
38



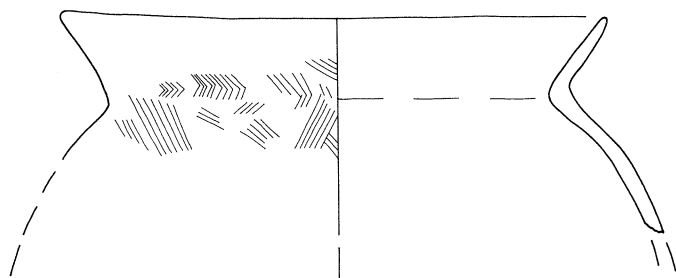
39



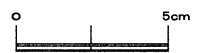
40



41

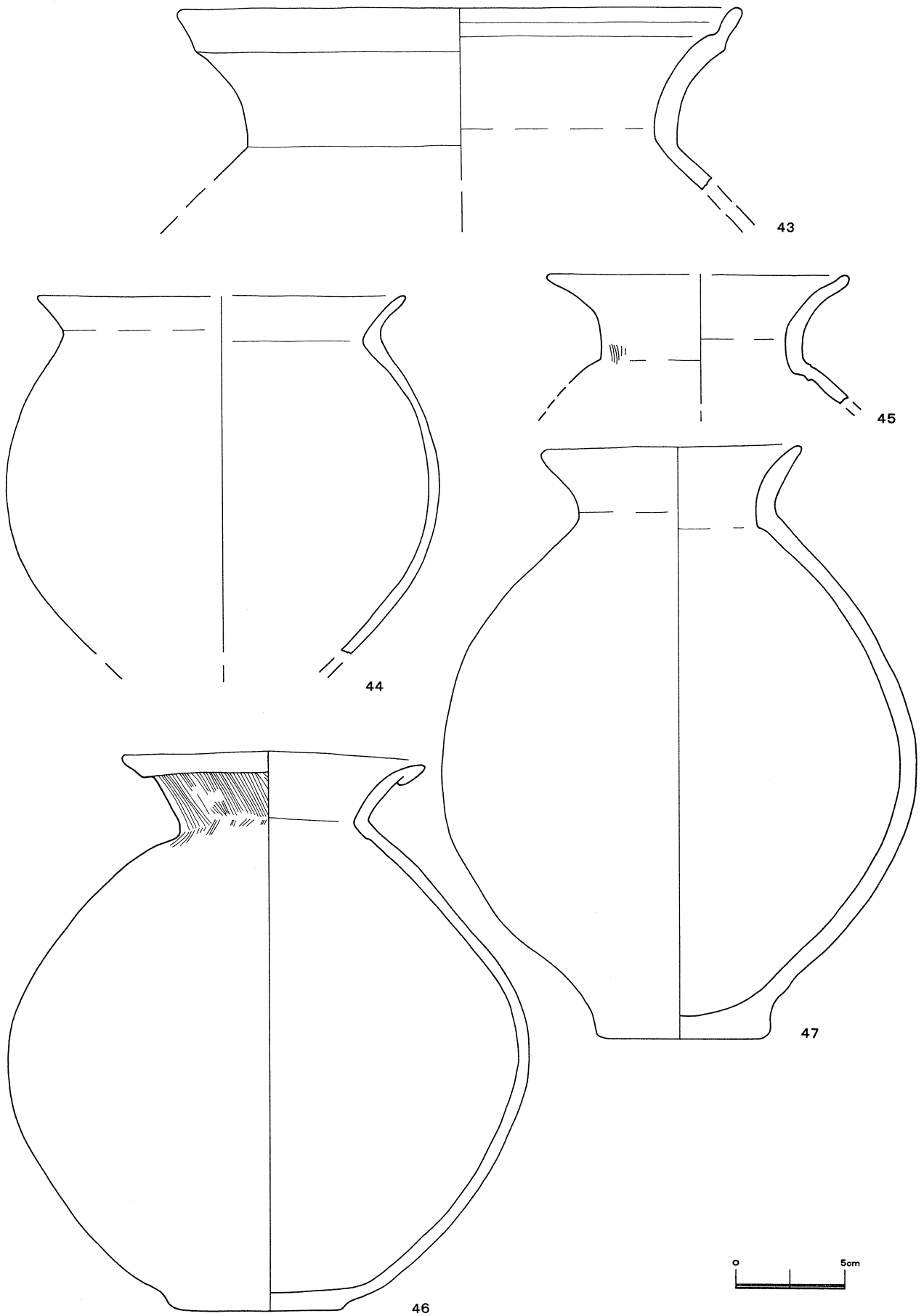


42

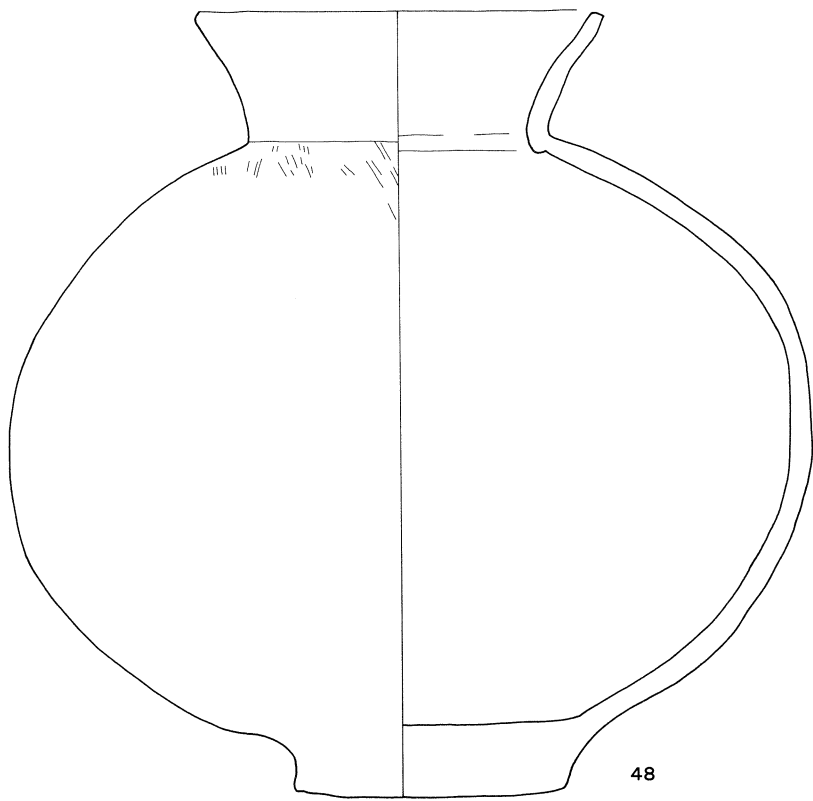


第7図 環濠跡出土遺物(4)

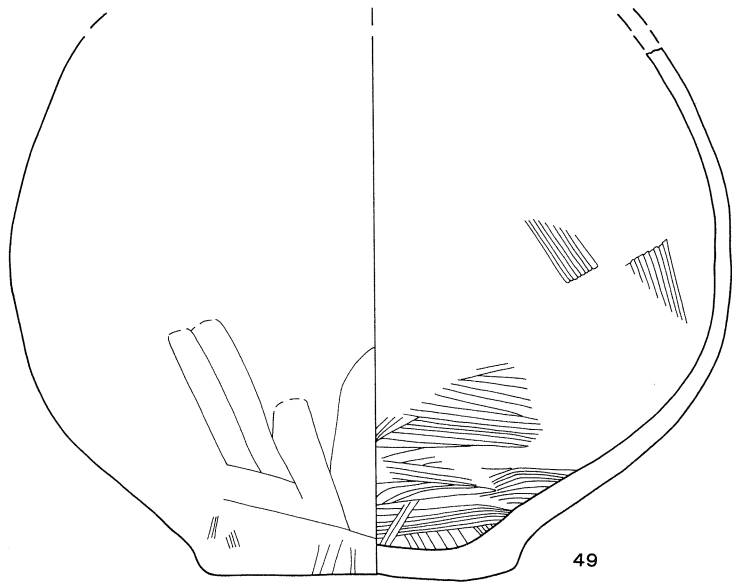




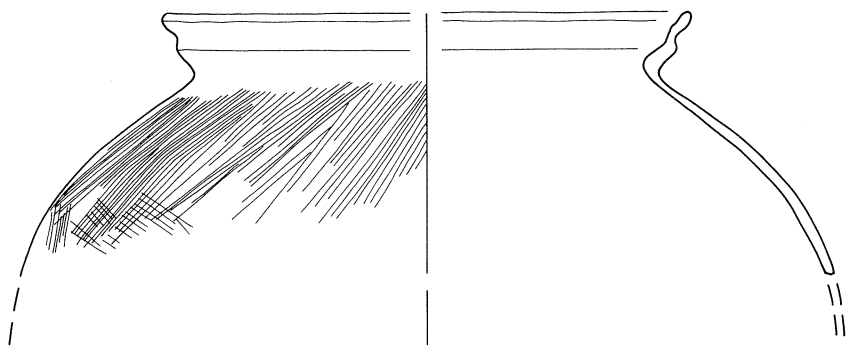
第8図 環濠跡出土遺物(5)



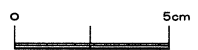
48



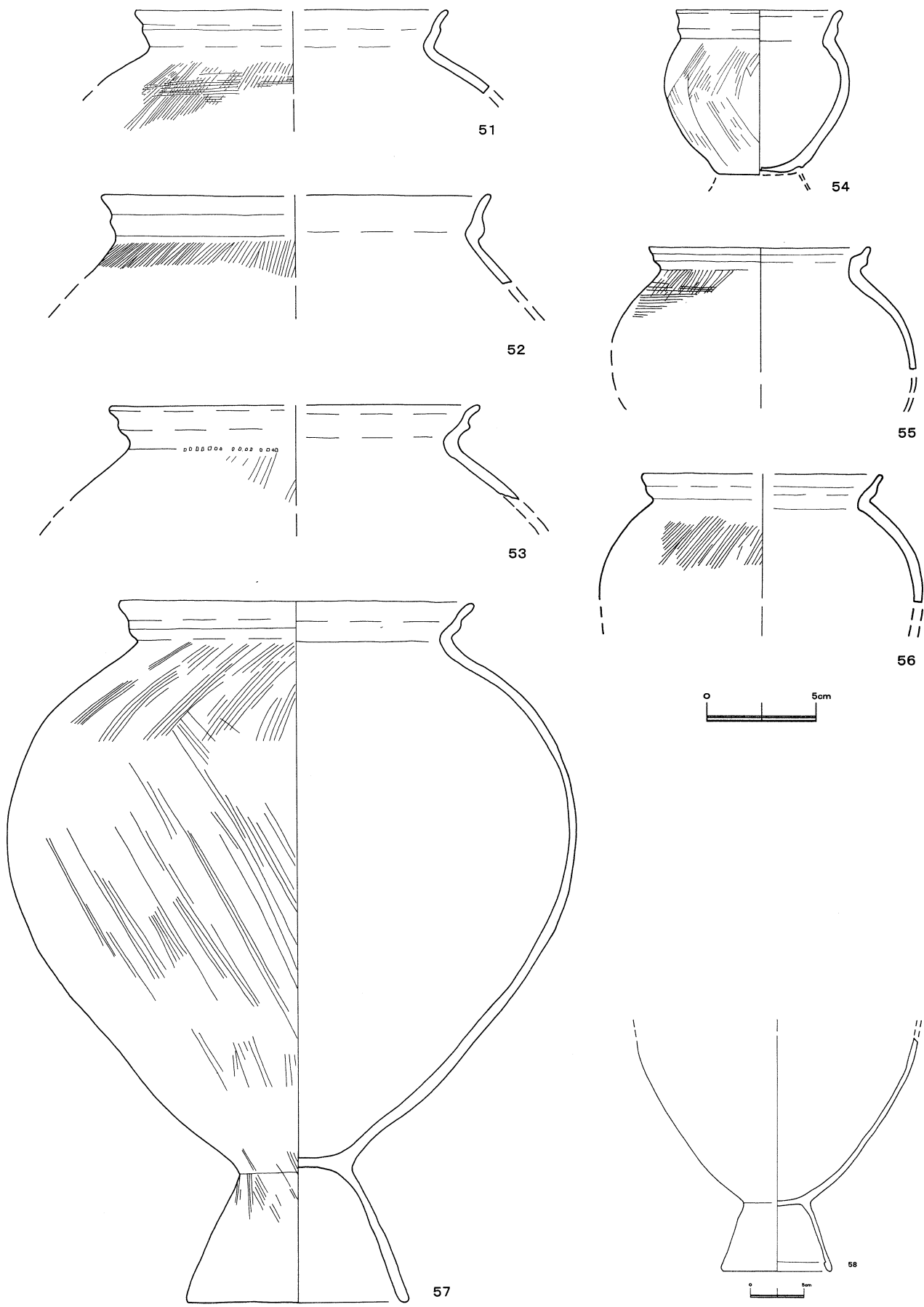
49



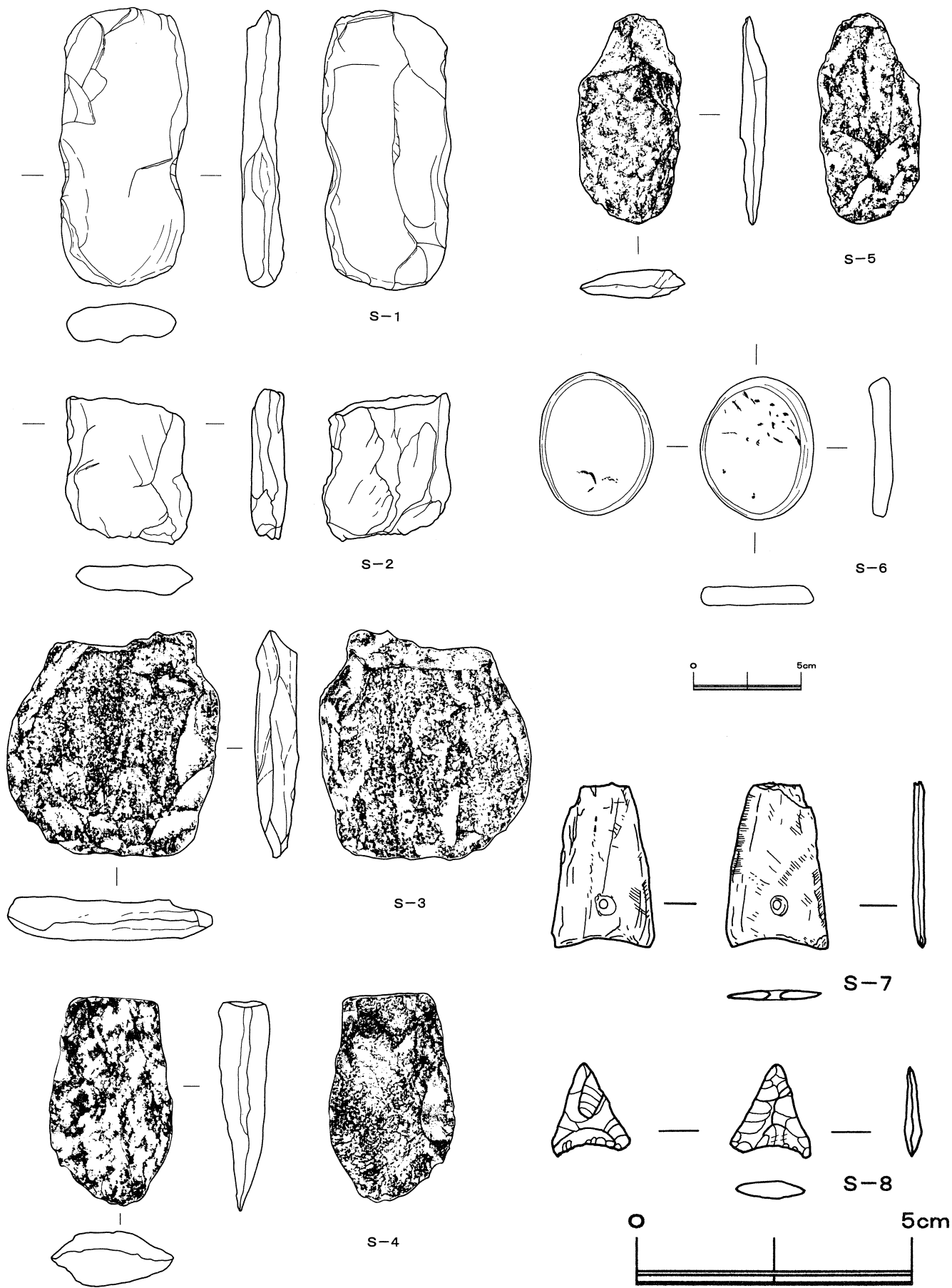
50



第9图 環濠跡出土遺物(6)

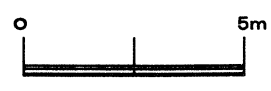
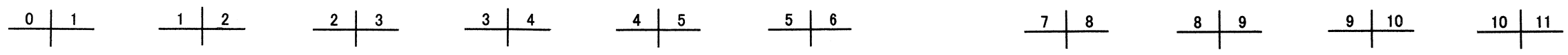
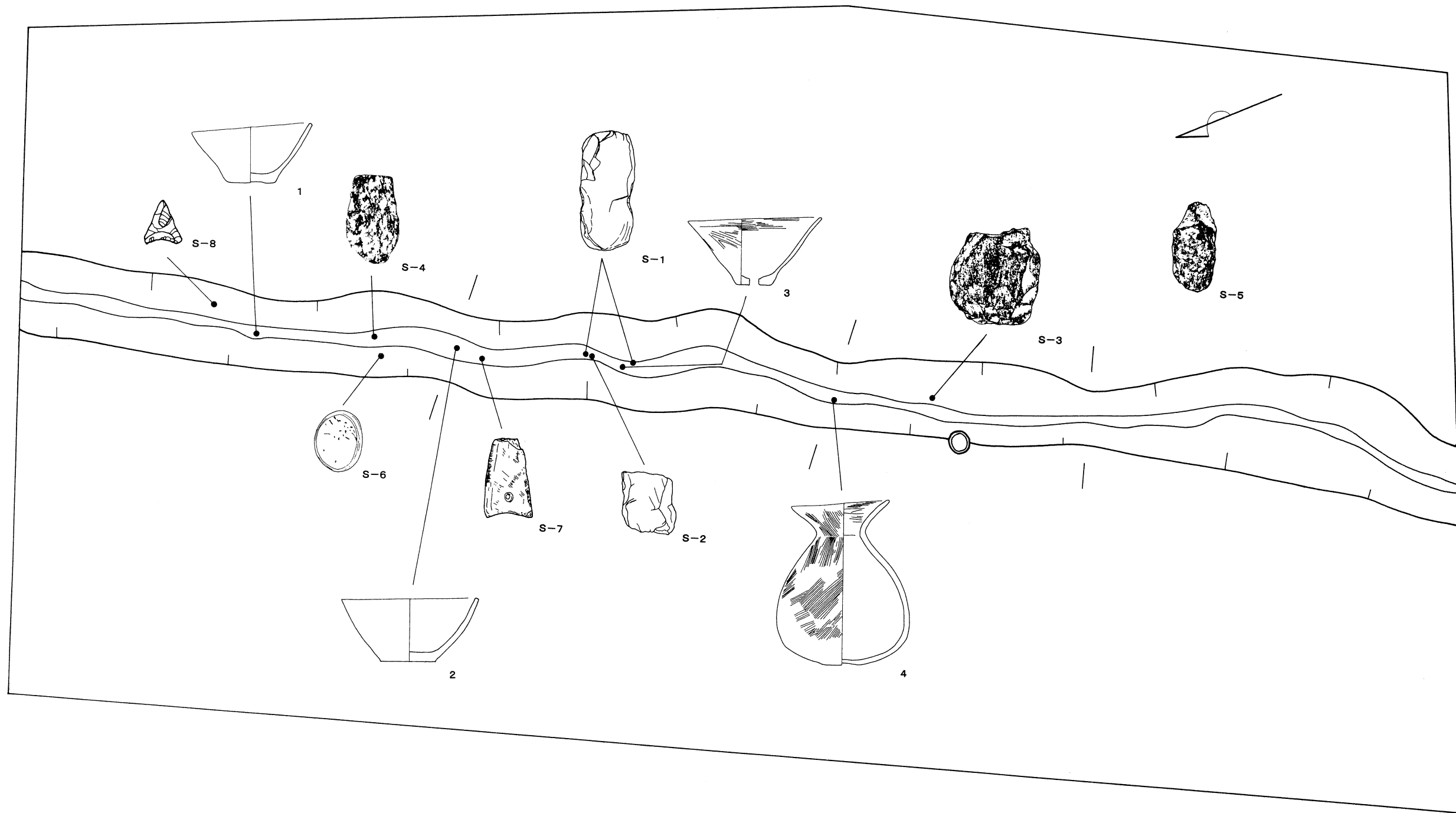


第10图 環濠跡出土遺物(7)

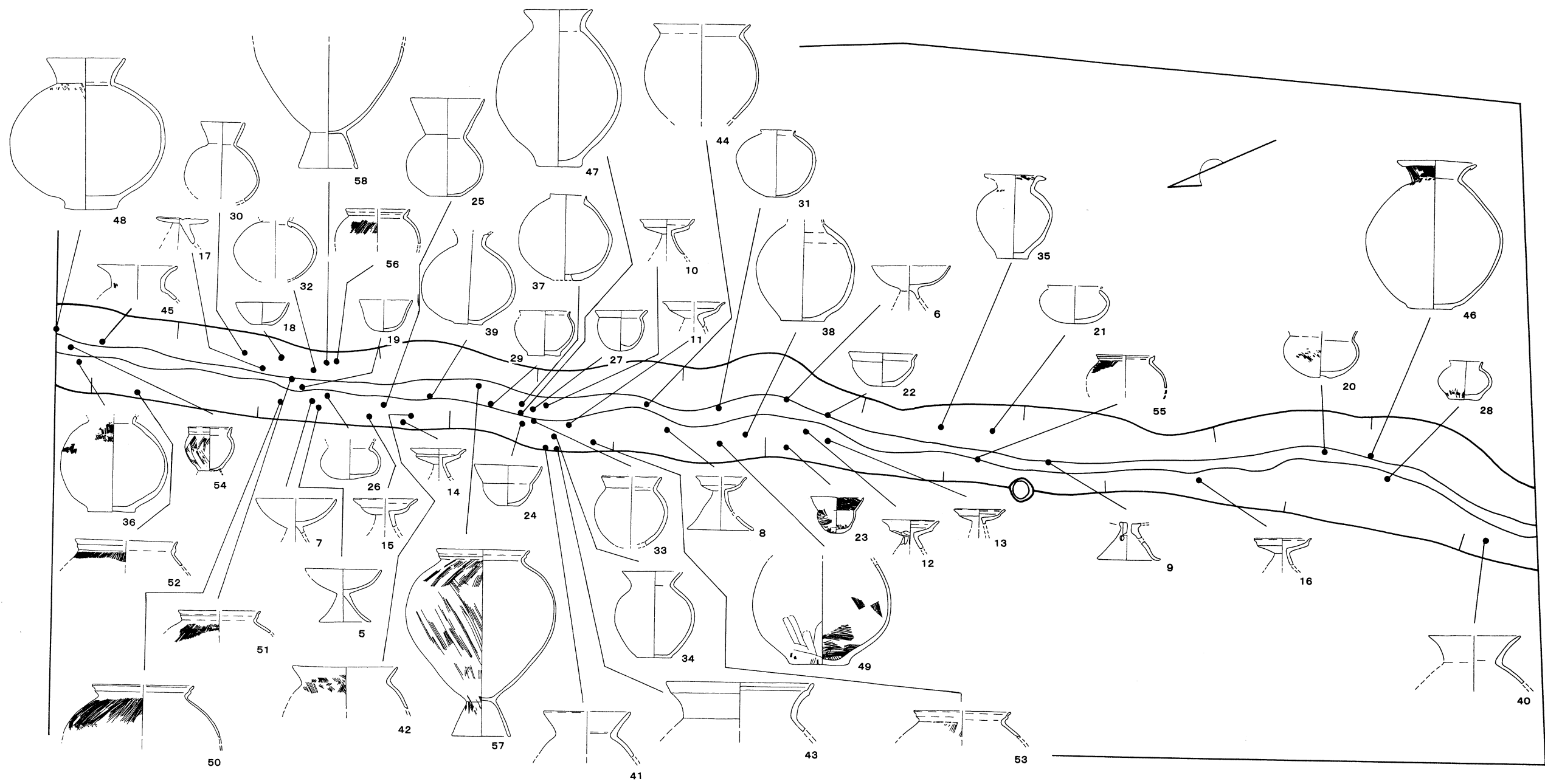


第 11 图 環濠跡出土遺物 (8)





第12図 遺物出土位置図(弥生)



第13図 遺物出土位置図(古墳)

## 第3章 ま と め

### はじめに

今回の調査では、面積は小規模であったが金の尾遺跡全体の性格を知るうえで大きな成果を得ることができた。特に環濠遺構の調査は金の尾遺跡の集落規模を特定するばかりでなく、弥生集落の消滅段階を探るうえで重要なものとなった。

### 遺 構

環濠跡は最大幅2.5m、最深部で1.45mを測り、V字型を呈す濠である。N-210°-Eで北北東から南南西にかけて構築されており北、南側へとさらに伸びている。ただ、遺構規模としては北側のグリット1-4付近が最大を測り、南側に進むにつれ浅くなる。しかし、遺構底部のレベルには高低差が見られないため濠が立ち上がっているとは言いがたい。調査区はもともと3枚の水田であり水田間は30~40cmの段差が生じている。このことから遺構南側は水田開発によって削平されたものと考えられ、環濠構築時は平均1.5mほどの深さがあったと推定される。

これまでの調査によって金の尾遺跡の居住域は東西210m、南北50m、墓域は東西210m、南北100mと推測される。1次調査によって明らかになった弥生後期集落跡の中で調査区北西端の第28号住居跡と環濠跡の直線距離は約130m、4次調査時の方形周溝墓群のなかで北端に位置した8号周溝墓からは直線にして160mを測る。山梨県内における環濠の調査はこれまでに西八代郡三珠町上野遺跡におけるN2、N3トレンチ内で確認された1例だけであるが、トレンチによる部分的な調査であったため、環濠の全容を解明するには至っていない。

今後、物見櫓など環濠関連の付随施設有無の確認や弥生時代後期環濠集落の全容を解明する上で、環濠の南北延長線の確認と集落域の範囲特定などが急務とならう。

### 遺 物

遺物は、遺物番号1~4の壺などの土器類及び石器番号7の磨製石鏃が2世紀末から3世紀初頭の弥生時代後期中頃、甲斐弥生編年(註1)のV期に該当するものと考えられる。

今回の調査でもっとも多く出土した遺物は環濠が1mほど堆積した段階で出土している。すべてが古墳時代初頭の古式土師器である。壺形土器を見ると最大径が体部下半にあり、最大径から屈曲して底部に至るもの(土器30、32、36、37、39など)と最大径が体部中程にあり緩やかに底部に至るもの(46、47)に大別される。

台付甕は実測可能なものがS字状口縁が9例である。しかし、図面化しえなかったが台付甕の台部の数は96個を数え図化したものを加えると98個体分となる。S字口縁部も多く出土しているがすべて口縁部は鋭利さを欠き、丸みをおびる。肩部のハケ目は横方向が残るもの、横方向が消え羽状ハケ目が鮮明になるもの、羽状ハケ目が無くなりハケ目が施されない部分が看取されるものに分類され、甲斐S字型編年(註2)の4~6期に該当するものと考えられる。

器台は図化されなかったものも含め32個体、高坏は同じく41個体におよぶ。

### おわりに

今回の調査によって発見された環濠は、出土遺物によって3世紀前半にはその機能を失い、4世紀前半には1mほどの堆積があり、濠の部分は若干の凹地になっていたことが確認された。弥生後期における集落の衰退過程や甲府盆地における弥生から古墳時代への移行を探る上で重要な発見となった。また、堆積過程で出土した遺物は、壺、甕類などからその年代は4世紀前半から5世紀初頭までの土器と考えられる。堆積土などから土器が出土する第3層形成時は小川のような小流があったと思われる。4世紀代の壺形土器の殆どが口縁部だけを欠いた

状態で出土していることなどから環濠遺構は古墳時代初頭にはその姿を祭祀関連の場所へと変容していった可能性が考えられよう。なお、遺構南側において古式土師器の出土が少なかったのは前述のように、開墾による削平が影響しているものと思われる。

現在までのところ、4世紀代に該当する遺構は金の尾遺跡内では住居跡1軒だけである。金の尾遺跡及び周辺遺跡を調査、研究する上で当該期の遺構の発見が時代の変革期を探る貴重な手がかりとなろう。

最後に発掘調査から報告書作成に至るまでご教示、ご協力を頂いた多くの方々に厚くお礼申し上げる。

註1 1993

中山誠二

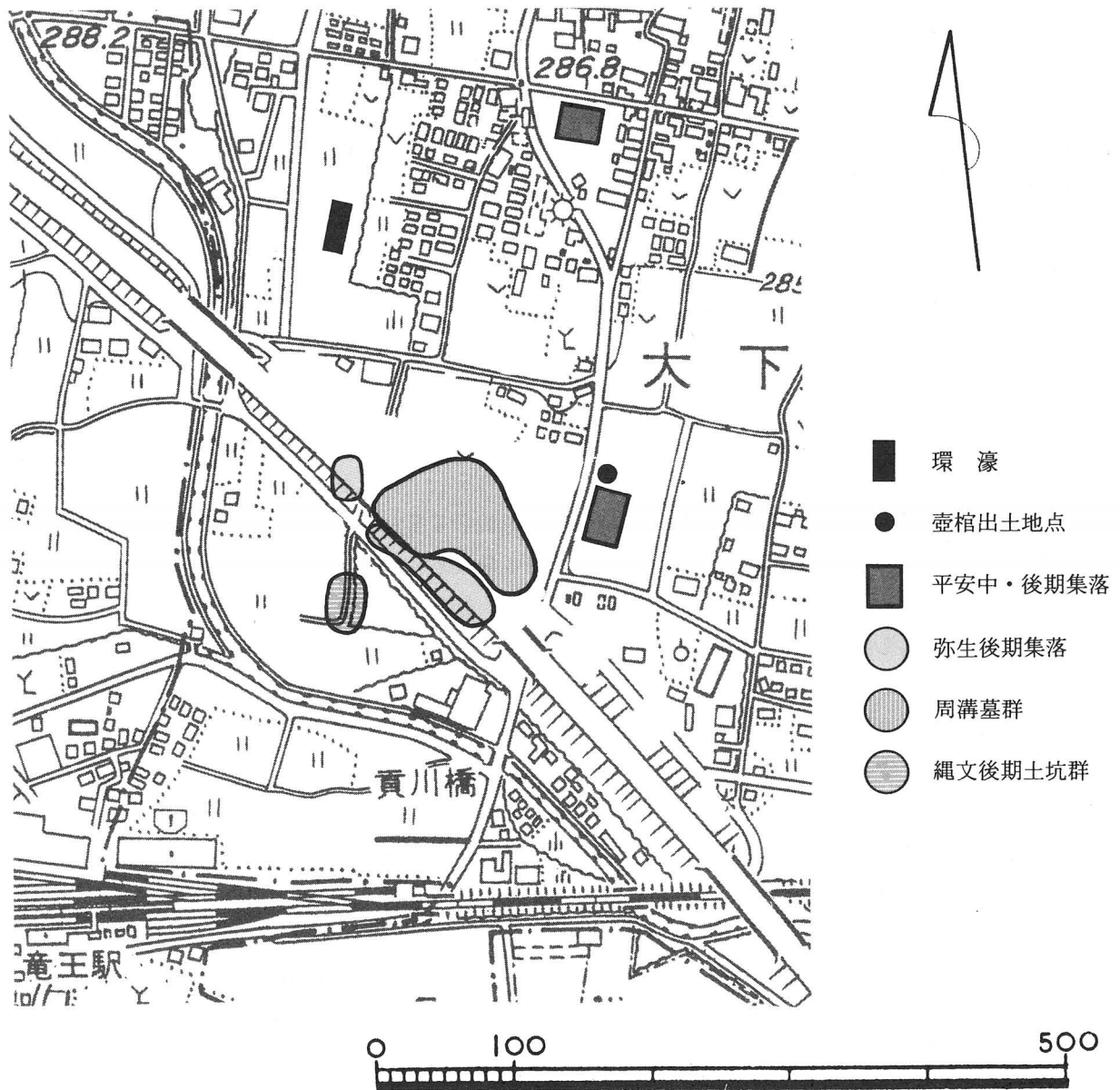
「甲斐弥生編年の現状と課題—時間軸の設定—」『研究紀要9』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

註2 1993

小林健二

「外来系から在来系へ—甲斐のS字甕の変遷」 “ “ “

参考文献 堀ノ内 泉 1989 『上野遺跡』三珠町教育委員会



第14図 金の尾遺跡遺構位置図

版 圖



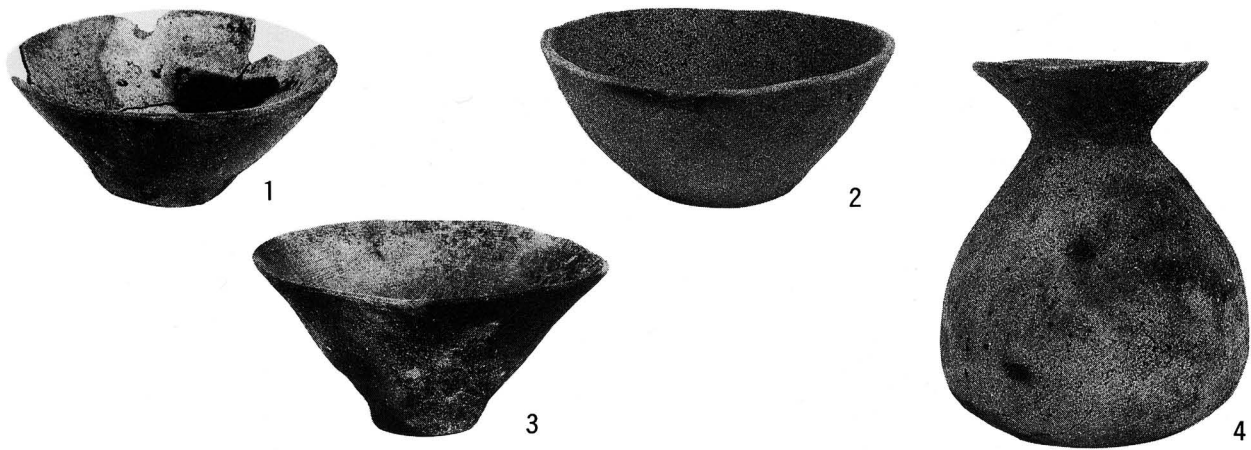


金の尾遺跡全景（北より）

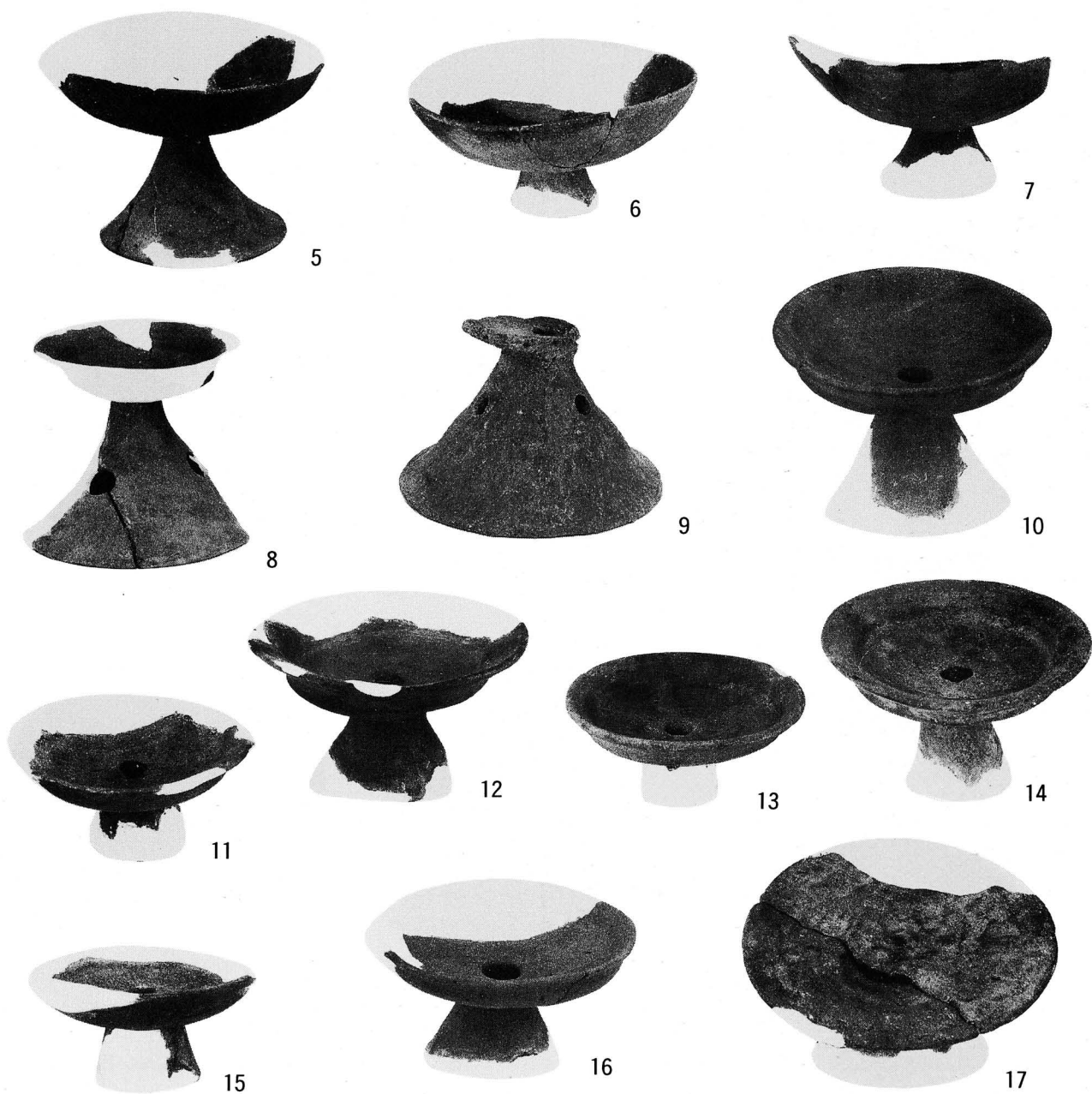




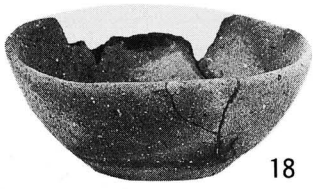
環濠跡全景（北より）



弥生土器



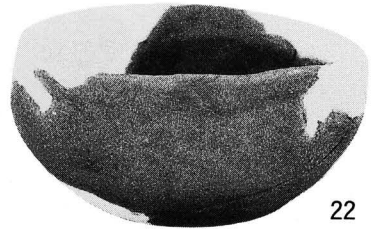
出土遺物（土器）



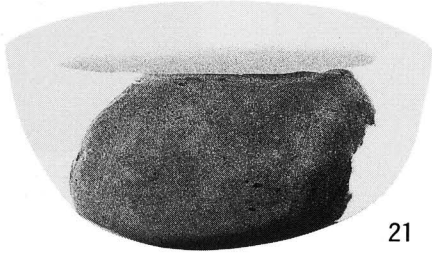
18



20



22



21



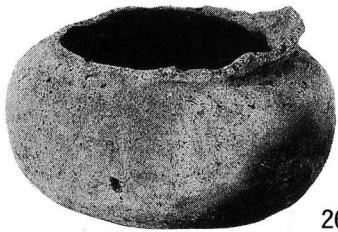
23



24



25



26



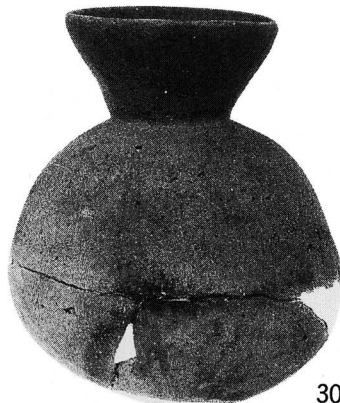
27



28



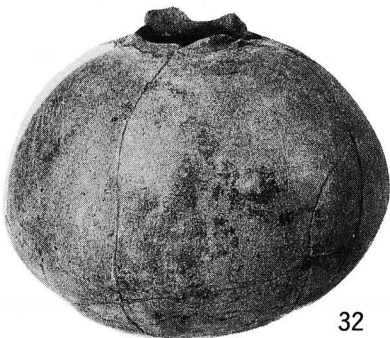
29



30



31



32





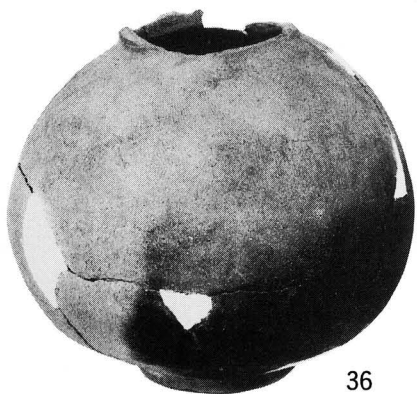
33



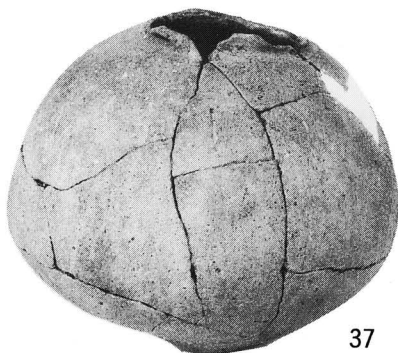
34



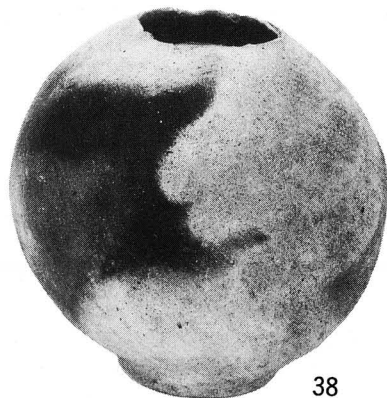
35



36



37



38



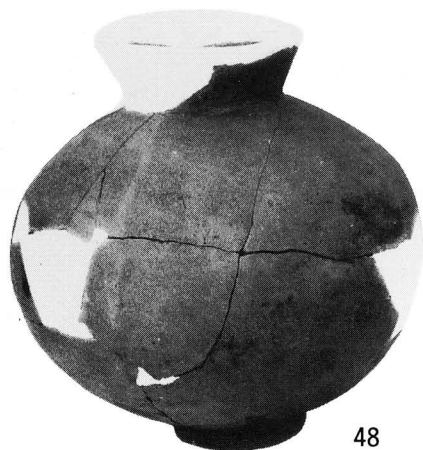
39



46



47



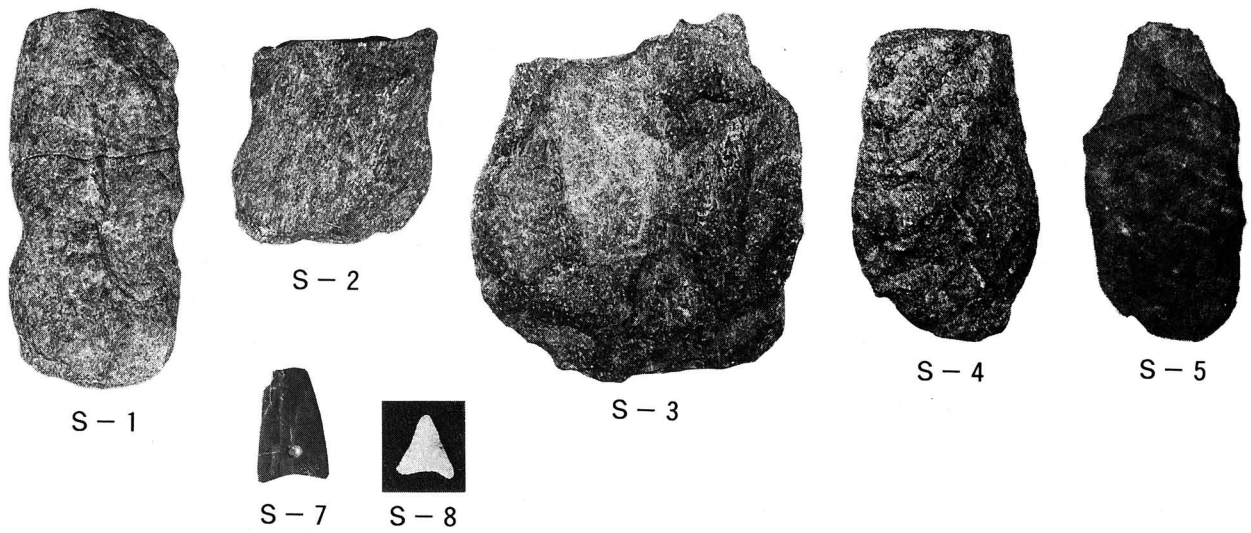
48



54



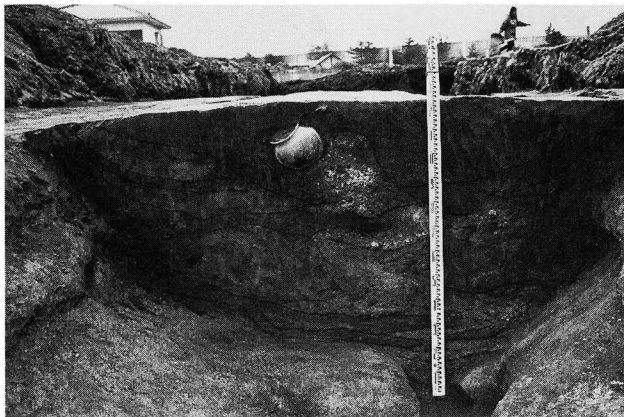
57



出土遺物（石器）



土師器出土状況



環濠跡土層断面状況



発掘調査参加者



# 報告書抄録

ふりがな	かねのおいせき							
書名	金の尾遺跡 VI							
副書名								
巻次								
シリーズ名	敷島町文化財調査報告							
シリーズ番号	7							
編著者名	大 嶋 正 之							
編集機関	敷島町教育委員会							
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020							
発行年月日	平成11年(1999)7月15日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
かねのおいせき 金の尾遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町大下条 750-1外	193828	6			平成8年 11月12日 ～ 平成8年 11月29日	300	スポーツ施設 建設工事に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
金の尾遺跡	環濠跡	弥生時代 古墳時代	環濠跡 1 土坑 1	弥生土器 土師器 石器	弥生時代末の環濠跡。			

## 敷島町文化財調査報告第7集

### 金の尾遺跡 VI

発行日 1999年(H11)7月15日

発行 敷島町教育委員会

印刷 ㈲協和印刷社

甲府市住吉四丁目12-24

TEL 055-237-1828(代)

